

同時双方向型「Win-Win」オンライン中国語課外授業について

真島 淳

1. はじめに

本学のグローバル・コミュニケーション学部のディプロマ・ポリシーに「他者と協調、協働できるコミュニケーション力を持つことができる」とあり、これは日本語を母国語とする他者はもちろんのこと、多種多様な言語を母国語とする他者とコミュニケーションする力を指すと考えられる。言語と文化の間には密接な関係があり、異なる言語を母国語とする他者は、日本語を母国語とする人々とは異なる価値観や行動様式を有することはいうまでもない。多様な文化的背景を有する他者と適切に協調、協働するためには、ディプロマ・ポリシーの3点目に掲げられている言語の基礎にある多様な社会、文化、歴史、政治、経済などに関する幅広い知識や教養も必要であるが、外国語によるコミュニケーション能力がなければ、他者との意思疎通を行うことができず、他者との協調、協働も困難であるといえる。つまり、外国語コミュニケーション能力は異文化コミュニケーション能力の根幹をなすものであり、言語知識の教授と「聴く、話す、読む、書く」の言語4技能の育成が外国語教育の最重要任務となる。実践的で高度な外国語の運用能力を有することがディプロマ・ポリシーの1点目に掲げられ、中国語コースにおいても、最初の2年間、週6コマの基本中国語科目を履修必修とし、基礎から実践的で高度な中国語運用能力を段階的に育成するカリキュラムとなっている。

郭春貴(2008)は、日本の大学の第二外国語としての中国語学習について、日本語環境における学習であること、授業時間が少ないこと、クラス規模が大きいことなどの問題点を挙げている。本学グローバル・コミュニケーション学部の中国語コースの基本中国語科目は10人程度の少人数クラス編成となっている。そして、中国語を母国語とする留学生が多く在籍する日本語コースとの共通講義があるだけでなく、学内に国際交流ラウンジなどの異文化交流スペースが設けられている。さらに、中国語コースでも中国や台湾の協定校などとの間で様々な交流活動を行っている。このように、中国語コースの学生の学習環境は一般的な学習環境より恵まれているといえる。しかしながら、クラス規模が小さいことが、すべての学生が授業において均等に中国語を運用していることを意味するわけではない。また、留学生や交流相手との間で、中国語で意思疎通を行うとは限らず、交流に重点が置かれる場合、自身の中国語に対して専門的なフィードバックが提供されることも考えにくい。

上記の状況に鑑みて、2022年2月下旬から3月下旬まで1年次生(新2年次生)を対象にZoomを用いた同時双方向型オンライン課外授業の実践を行った。3月下旬からは2年次生(新3年次生)を対象に同様の実践を行っているが、現在すべての実践が終了していないため、本稿では1年次生を対象とした実践結果について考察を行いたい。

2. 先行研究

中国語母語話者を相手とする遠隔交流を活用した中国語教育・学習の実践研究として、城間(2013)、砂岡・他(2015)、杉江・三ツ木(2015)、杉江(2017)、楊・他(2022)などがある。

城間(2013)の実践では、沖縄、台湾、大阪の高校生を対象として、中高生向けに開発したSNSを用いて交流を行い、またSNSやテレビ会議システムを用いたプロジェクト学習を行っている。

早稲田大学の多言語遠隔交流(CCDL)では、東京、北京、台北、ソウルなどアジアの高等教育機関の学生が電子メールやなどを通して会議を行い、討論のテーマを選択した後、遠隔会議システムを使用して同時双方向型の討論を行っている(砂岡・他、2015)。

杉江・三ツ木(2015)、杉江(2017)の実践では、語彙・文法学習、eラーニングの授業で準備を整えた後に、中国人学生との間で同時双方向型遠隔交流を行い、ブレンド型学習モデルに遠隔交流を組み込んでいる。

楊・他(2022)の実践は、Zoomやwechatを用い、日本と中国の学生が自己紹介を行った後、グループごとに決定したテーマについて、資料調査、発表原稿・パワーポイントの作成を行った後、プレゼンテーションを行うというものである。

上記の各種実践の共通点として、第二外国語として中国語を学ぶ学生が対象となっており、実際の対話や交流を通じて異文化的背景を有する人々と接することに重点が置かれていることが挙げられる。また、お互いの学習言語を使用して対話や交流を行うため、中国語を学ぶ日本の学生が実際にどの程度中国語を使用するかはコントロールが難しく、自身の中国語の改善点を感じることはあっても相手側からの明確なフィードバックを得ることは難しいと考えられる。さらに、グループ形式での対話・交流が中心となるため、学生一人ひとりの発言の量に一定の差が生じることは想像に難くない。

本稿では、これまでの先行研究実践を参考に、中国語を専門的に学ぶ学生を対象として、中国語運用能力、とりわけ「話す、聴く」能力を伸ばすことに重点を置いた同時双方向型オンライン課外授業を展開することとした。

3. オンライン授業の概要

3.1. オンライン授業の特徴

今回実践を行ったオンライン授業において提携を行ったのは台湾清華大学の大学間国際学位プログラム中国語教育専攻(跨院國際學位學程華語教學組)であり、対話を行う相手は中国語教育を専門的に研究する大学院生である。そのため、本学の学生は、先行研究における交流授業のように、交流相手の学習言語(日本語)を使用して対話を行う必要がなく、既習の中国語を運用して対話することに集中することができる。また、通常のオンライン授業とは異なり、大学院生によって授業が行われるため、双方の年齢も近く、同年代での身近な話題を通じた文化交流も期待できる。一方、台湾の大学院生にとっては、これまでに習得、蓄積した中国語教育に関する知識や経験を実践し、今後の改善点を見出すことができる。また、学位獲得の条件の一つとして100時間の中国語教育実習が課されており、今回実施したオンライン授業がその実習時間の一部としてみなされる。このよ

うに、オンライン授業に参加する双方が「Win-Win」の関係になることが今回実践を行ったオンライン授業の大きな特徴であるといえる。

次に、先行研究は、授業時間内における実践か授業時間外における実践かに関わらず、正規授業の一環として遠隔交流を行っているが、本稿の実践は正規授業外の課外授業と位置付けられ、オンデマンド形式を採用し、学生のニーズに合わせたきめ細かい授業が提供できるのも特徴である。

さらに、先行研究とは異なり、今回実践を行ったオンライン授業では完全に一对一の形式を採用し、人目を気にせず学生それぞれのペースで授業に臨めるようにしている。同時に、一对一の授業とのことで学生が感じる負荷を考慮し、1年次生の授業時間は20分、2年次生については25分に設定した。

3. 2. 授業設計

3. 2. 1. 授業回数とテーマ

授業は合計8回設定した。1年次生については、大学の春休み期間中である2月24日から3月22日に授業を設定した。2年次生については、2月中旬よりオンライン Semester 留学が始まり、留学への適応期間を考慮し、Semester 留学授業開始後1か月ほど経過した3月28日から5月26日の間に授業を設定した。また、2年次生については、同じテーマの授業を週2回設定し、自分の都合の良い期日を選択できるようにした。

授業テーマについてであるが、「外国語学習のめやす 高等学校の中国語と韓国語教育からの提言」(當作靖彦・中野佳代子、2013：v)の「コミュニケーション能力指標」において提示された15の話題分野を参考に設定した。「15の話題分野は、外国語のカリキュラムで初級から比較的良好に使われる」(當作靖彦・中野佳代子、2013：viii)のものであり、また「コミュニケーション能力指標」では各話題分野を言語運用能力の4レベルに分けて指標を表示しており、今回のように学習時間の異なる学生を対象に共通のテーマを設定する上で参考になると考えたからである。

今回のオンライン授業において、学生が事前準備を行う参考となるように、「コミュニケーション能力指標」の内容をもとに具体的な内容例を提示した。

表 1. 各回の授業テーマと内容例

回	1年次生 期日	2年次生 期日	テーマ	内容例
1	2/24	3/28 3/31	自分・家族	<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介 (長所・短所、得意・苦手など) ・家族紹介 (職業、性格、ペットなど) ・将来就きたい仕事 (日本の就職活動) ・自分の人生プラン ・中国語を選んだ理由
2	3/1	4/7	大学生活	<ul style="list-style-type: none"> ・通学の方法 ・大学の所在地、大学周辺の環境 ・大学の特色、大学の施設・設備 ・大学の先生 ・履修したことのある科目、今後履修したい科目 ・休み時間の過ごし方 ・大学行事

				<ul style="list-style-type: none"> ・大学での国際交流 ・サークル活動 ・大学入試、大学の期末試験
3	3/3	4/11 4/14	日常生活	<ul style="list-style-type: none"> ・一日の生活リズム ・一週間の生活 ・自分の持ち物 ・アルバイト ・自分（の家）の生活習慣 ・家事 ・日常生活での悩み
4	3/8	4/18 4/21	飲食	<ul style="list-style-type: none"> ・よく食べる（飲む）もの ・好きな（嫌いな）食べ物 ・日本料理、日本茶、日本酒の紹介 ・食べたいエスニック料理 ・最近の会食の思い出 ・日本の飲食に関する習慣 ・外食について
5	3/10	4/25 4/28	居住環境	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の部屋（家）の紹介（間取り、家具） ・自分の部屋の良いところ、悪いところ ・居住環境（近くの生活施設など） ・将来住みたい部屋 ・理想的な居住環境 ・将来住んでみたい国や都市
6	3/15	5/9 5/12	レジャー・娯楽	<ul style="list-style-type: none"> ・週末、休日の過ごし方 ・長期休暇の計画（以前の思い出） ・趣味の紹介 ・課外で学んでいること（習い事） ・好きなスポーツ ・見たことがある映画、小説、聴いたことがある音楽 ・アルバイトの内容 ・参加したことのあるボランティア活動 ・ショッピング、SNS、ファッションなど
7	3/17	5/16 5/19	旅行と交通	<ul style="list-style-type: none"> ・訪れたことがある場所と感想 ・日本の観光地とお土産の紹介 ・将来訪れたい場所 ・自動車免許の有無 ・自分の旅行プランの紹介 ・旅行の準備作業 ・旅行の時に利用する交通機関とその特色 ・旅行の時のトラブル
8	3/22	5/23 5/26	伝統行事と風習	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の四季、天候の紹介 ・日本の伝統的祝日の紹介 ・日本の風習（贈り物など）の紹介 ・冠婚葬祭の風習 ・日本のタブー

3.2.2. 授業の流れ

毎回の授業の流れは図1に示す通りである。授業日までに、学生は各自授業テーマや内容例を参考に、既習内容を活用して発表内容を短い作文にまとめておく。授業当日は、まず教師が近況などに関する簡単な質問を行い、学生がそれに答える形でウォームアップを行う。

ウォームアップの後、学生はテーマに沿って事前に準備した内容を発表する。学生が発表を行っている間、教師は学生の発表内容を聴き、中国語の発音、文法、表現などのチェックを行う。学生の発表が終わった後、その発表内容に関する質疑応答を行い、適宜中国語の発音、文法、表現に関する指導を行う。そして、発表内容に関連した会話練習や文化紹介を適宜行う。

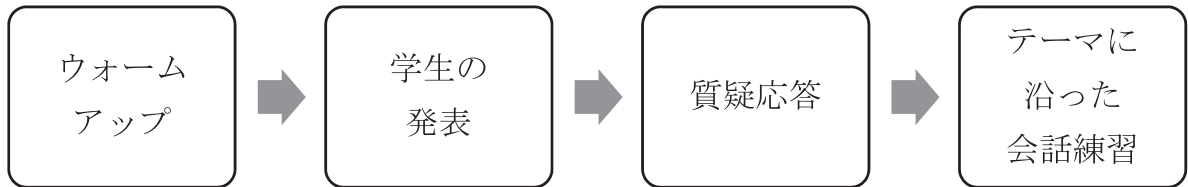


図1. 授業の流れ

授業を担当する教師は、毎回の授業後に授業の様子を録画した動画を提出し、授業ジャーナルへの記入を行う。今回の授業主催者である筆者は、提出された動画のチェックを行い、気付いた点について授業担当教師へフィードバックを行う。

4. 結果と考察

本稿では、既に実践が終了している1年次生（参加者1名）の授業実践について考察を行う。アンケート調査の結果、授業動画、授業ジャーナルの内容について、今後の授業設計・改善だけでなく実践研究としての公表など学術的研究を目的とした用途にも使用されることを事前に説明し、了承を得ている。

4.1. 学生アンケート

4.1.1. 授業の形式について

今回のオンライン授業に参加した1年次生は、6つの時間帯から都合のよい時間を選択し、「自分・家族」、「大学生活」、「飲食」、「レジャー・娯楽」の計4回に参加した。自分が参加したいテーマ、回数、時間を選べる形式について学生は「非常に良い」と答えている。

オンライン授業時間の長さについて、学生は「ちょうどよい」と感じており、一対一の形式についても「非常に良い」と回答している。その理由として、「自分の話したいことをゆっくり伝えられる」と述べており、グループやクラス全体での授業、交流とは異なり、人目を気にせず自分のペースで中国語を運用し会話することができたと考えられる。今回、オンライン授業に参加した学生は、これまでに中国語圏の人との交流活動に参加したことがあるが、今回のオンライン授業は「一対一であったこと」がこれまでの交流活動より良かったと述べている。

また、今回 Zoom を使用して授業を行った点について、学生は「非常に良い」と答えており、その理由として「家ですぐに受けられる」と述べている。場所を選ばず、対面に限りなく近い授業を受けられることができるだけでなく、学生が既に使い慣れているシステムを利用することはやはり授業設計において大きなポイントであるといえよう。

4. 1. 2. 授業活動について

今回設定した授業テーマについて、学生は「非常に良い」と答えており、他に会話したいテーマも挙げられていない。今後2年次生のアンケート結果も参考にテーマの調整について考えていきたい。

次に、毎回の授業の流れについて、学生は「非常に良い」と回答しており、その理由として「自分の用意した話に沿って進むのでやりやすかった」と述べている。学生は「毎回準備をして授業に臨んだ」と回答しており、授業の準備についても「あまり大変ではなかった」と回答している。また事前に提示したテーマに沿った内容例も「非常に役にたった」としている。今回のオンライン授業を設計するにあたり、事前準備が学生の大きな負担になるのではないかと心配をしていた。しかしながら、教材もなくその場で話題を考えて会話練習だけを20分間行うのは学生にとって困難であり、初級学生にとってはなおさらである。また、教える側にとっても、発表の内容が学生の到達レベルや訂正が必要な点を的確に知る材料となり、その後の会話練習の材料ともなる。そのため、学生が事前準備とそれにもとづく発表を行うことは授業の方向性を決める上で、学生と教員双方にとって非常に有益であるといえる。

4. 1. 3. 授業効果について

このオンライン授業は「話すこと、聴くこと」に重点を置いているが、事前準備として発表内容を簡潔な作文にまとめることで、「書く」力の向上にも役立つと考えられる。それを示すものとして、今回のオンライン授業に参加して、中国語の発音、会話力、リスニング、読解能力と同様、書く力（作文力）の向上についても学生は「強く感じる」と回答している。

また、中国語能力だけにとどまらず、今回のオンライン授業を通して、お互いの言語や文化について新たな発見があったと感じるかという問いに対して、学生は「強く感じる」と回答しており、「食文化や街の違いを知れた」と述べている。授業では、会話の内容から派生する自然な形で、日本と台湾の食文化や日常生活にみられる相違点について触れられており、異文化理解・交流にもつながったと考えられる。

さらに、今回のオンライン授業に参加して学生は中国語学習意欲が「強くなった」と回答しており、今後同じようなオンライン授業がある場合は「ぜひ参加したい」と回答している。一対一の形式で中国語によるコミュニケーションを行った経験は、学生の中国語学習に対するモチベーションを強化するだけでなく、学習ストラテジーの一つとしても位置付けられており、学生にとって非常に有意義な学習経験となったことがみて取れる。

4. 2. 授業ジャーナルと教師へのフィードバック

授業ジャーナルでは、学生の授業におけるパフォーマンスと教師が感じた学習における難点を挙げた上で、それに対して教師がどのように対応したかを整理することとなっている。

今回オンライン授業に参加した1年次生の授業でのパフォーマンスと教師が感じた学生の中国語学習における難点は、発音、文法、語彙の大きく三つに分けられる。紙幅の関係で、担当教師が授業ジャーナルで指摘した点とそれに対する教師の対応の一部を以下の表2に示す。

表2. 授業ジャーナルの内容（原文は中国語、筆者訳）

学生のパフォーマンス、学習における難点	教師の対応
A. 発音	
A1. 子音	
[shi]などのそり舌音について、舌を立てて発音することを十分に意識できていない。(2/24)	学生が話した内容を繰り返す際に、学生が十分に意識できていない箇所はゆっくりと発音することで、学生に注意すべき発音について意識させる。
A2. 母音	
[eng][ou][ü]の発音が正確でなく、聴き取りにも影響すると考えられる。(2/24)	教師が単独で2回発音した後に、学生に発音させ、正確に発音できるようになったのを確認してから次に進む。
[an]を[ang]と発音している。(例:「玩」と「王」) (3/15)	学生が話した内容を繰り返す際に、学生が十分に意識できていない箇所はゆっくりと発音することで、発音の違いについて意識させる。
A3. 声調	
連続で変調する場合の処理に苦労している。 (3/15)	学生が話した内容を繰り返す際に、学生が十分に意識できていない箇所はゆっくりと発音することで、発音の違いについて意識させる。
B. 文法	
語順に注意しており、学生自身で調整ができる。(2/24) 学生が話した語順がやや不正確である。(3/15)	教師が語順の正しい完全な文を繰り返し、状況によってはパワーポイント上に打ち出して表示する。
内容理解には影響しないものの、文法上の誤りがみられる(例:介詞の未使用など)。(3/18)	訂正を行った文を表示し、学生に文の構造について注意させる。
C. 語彙	
学生が事前に準備した発表内容について、全体的に言いたいことは伝わるが、あまり使われない語彙がみられる。(3/8)	まず学生が発表した文をパワーポイント上に打ち出し、次に新しい文を打ち出し、比較する。学生が発したことばを強制的に修正するのではなく、参考となる文、語句言い回しを提供する。

また、学生の授業パフォーマンスとそれに対する教師の対応だけでなく、ジャーナルでは毎回の授業全体を通して、今後改善が必要な点や気付いた点についても整理を行っており、以下の表3に示す。

表 3. 担当教師による改善点のまとめ（原文は中国語、筆者訳）

2/24
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生が中国語を聴くことにあまり慣れていないため、教師は文の長さ、使用する文法、語彙などに注意すべきである。 ・ 教師が文字をパワーポイント上に打ち出すことで、学生は教師の質問内容をより早く、よりはっきりと理解できるが、学生が過度に文字に依頼することへつながる可能性があるため、教師はその点に注意し調整を行うべきである。
3/8
<ul style="list-style-type: none"> ・ 学生が緊張のため、教師の中国語をあまり聴き取れない場合は、話すスピードや文の構造を調整すべきである。しかしながら、あまりに簡単すぎる文や、誤った文法を使用することを避けるよう注意すべきである。
3/15
<ul style="list-style-type: none"> ・ 授業の最初に使用した（学生が聴き取れなかった）「有名」という語彙について、より簡単な形（例：「很多人知道（多くの人が知っている）」）で、学生に意味を説明することができる。 ・ できる限りまず学生に聴くことに集中させ、学生が内容を聴いて理解できない場合に限って、その単語をパワーポイントに打ち出して表示すべきである。
3/18
<ul style="list-style-type: none"> ・ 質問の技法に注意すべきである（語彙の難易度、文法構造の複雑さ）。また質問するときに、明確に語気助詞を使用することで、学生が教師の話の意味を理解する手助けとなる。 ・ 教師の質問文は非常に重要で、もし質問文の中で使用されている語彙、文型の中に学生が回答する際に参考となる部分があれば、学生の文型習得に役立ち、学生の反応スピード、使用語彙・文法の正確性などにおけるパフォーマンスを向上させることができる。

毎回の授業終了後、筆者は担当教師が共有ボックスにアップロードした授業動画を確認し、適宜フィードバックを行っている。紙幅の関係で、本稿では1年次生対象に行った4回の授業へのフィードバックの一部を表4に示す。

表 4. 教師へのフィードバック（原文は中国語、筆者訳）

2/24
<ol style="list-style-type: none"> 1. 生き生きとして活気に満ちた授業は学生の学習ストレスを軽減することができる。 2. 学生が発表しているときに、教師は学生の発音で比較的大きい問題点を記録しておき、発表後重点的に教師について発音練習をするとよい（例：第3声+第2声の組み合わせ、ian/iangの区別）。 3. 学生の表情や反応を見ながら、新出語彙や学生が発音できない語彙を判断し、適時ピンインをパワーポイントに打ち出して学生の発音をサポートするとよい。 4. むだな言葉（例：三月一号的<u>时候</u>）や中国と台湾での発音の違い（例：「期」の声調）に注意すべきである。

3/8
<ol style="list-style-type: none"> 1. 学生の表情を見て、学生が聴いて理解できていないようであれば、教師が話すスピードを落とす、言い換えを行う、パワーポイント上に打ち出す、ジェスチャーを用いる、写真を見せるなどの方法を用いて学生が聴き取れるように対応を行っている。 2. 教師は適時日台間の文化の違い(例:飲酒が可能な年齢、生卵を食べるか)について触れており、学生の異文化理解促進につながる。 3. 教師は既習だと考えられる文型(例:「虽然…但是～」「因为…所以～」)を使用しており、学生の復習と文型の定着に役立つと考えられる。 4. 話すスピードはちょうどよいが、学生の表情や反応を見て、特に長めの文についてはもう少しゆっくり話してもよい。
3/15
<ol style="list-style-type: none"> 1. 適時事前に準備しておいた教材を使用して当日のテーマと関連する会話活動へとつなげている(例:学生がアルバイトについて紹介をしたのち、教師はパワーポイントを使って、アルバイトの時間、場所、職場への交通手段、感想などについて質問している)。 2. 教師は辛抱強く学生の話聴いて、状況に応じて適時サポートを行っており、できる限り学生に中国語を用いて話をさせようという気持ちがみて取れる。1回目の授業に比べて、学生が既習の中国語を運用して自分の考えを伝えようとする気持ちが強くなっていると感じられる。 3. 学生の話した中国語に文法的な誤りがみられる場合、教師は正確な言い方で学生の話した内容を繰り返しており(例:「二岁」と「两岁」)、この学生自身に気付かせるという修正手法は素晴らしい。
3/18
<ol style="list-style-type: none"> 1. 教師は学生のレベルにあった話題、質問を多く準備している。授業時間に限りがあるため、今回はその中のいくつかしか質問できず、すべての質問について話すことができなかったが、教員が十分な授業準備を行っていることがわかり、また実際の授業状況によって柔軟に対応しようとも思われる。 2. 教師は学生にできる限り中国語を話してもらおうようにするだけでなく、自身の台湾の日常生活を共有しており、このようなインタラクティブは学生の中国語学習の動機を強める上で役立つと考えられる。

授業ジャーナルは、教師が授業を行ったことに満足せず、自身の授業実践を振り返り、今後の授業へつながる改善点を明確化することができる。また、授業ジャーナルとは異なり、学生アンケートや第三者からのフィードバックについては、異なる複数の視点から多角的に授業実践を振り返り、点検することへつながり、担当教師の教育スキルを向上させる上で非常に役立つものと考えられる。また授業へのフィードバックを行うことは、第三者の中国語教育経験を他の教師と共有するだけにとどまらず、第三者にとっても他の教師の授業実践を観察することで、自身の授業を再点検したり、新たな教育手法を学ぶ機会となりうる。

5. 今後の研究について

本稿で考察を行った1年次生対象のオンライン授業に限って述べれば、その授業設計について学生の満足度も非常に高く、学生が中国語の4技能の向上を感じるものになっただけでなく、中国語学習動機の強化や異文化理解の面においても一定の効果があったと考えられる。また、教師にとって、模擬授業ではなく、実際の授業を担当することを通じて、試行錯誤の中で授業スキルを磨き、改善点を見出すことができているだけではなく、第三者からのフィードバックを得ることもでき、多くの収穫があったと考えられる。

今後は、2年次生を含む学生と担当教師全員を対象としたアンケート調査やインタビュー調査の結果、授業映像、授業ジャーナル、フィードバックの内容をもとに、学生と教師の二つの視点から今回の同時双方向型オンライン授業の効果についてさらなる考察を行い、改善点を明らかにした上で、行動研究を継続していきたい。

さらに、授業設計の観点からだけでなく、学生の授業におけるパフォーマンスから、日本語を母国語とする中国語学習者の中国語表現（中間言語）の特徴や学習上の難点についても分析を行いたい。

参考文献

- [1] 郭春貴、(2008)、「日本の大学二外汉语課程の教学模式探讨」、『中国語教育』、6、19-33
- [2] 杨彩虹、刘勤、(2022)、「中日大学生线上交流活动实践研究——对中日双方问卷结果的分析——」、『中国語教育』、20、117-137
- [3] 城間真理子、(2013)、「コミュニケーション能力と協働力の育成をめざして—高校中国語教育での実践報告」、『中国語教育』、11、33-45
- [4] 砂岡和子、馬燕、施信余、(2015)、「國際遠程教育的實踐與經驗—以“亞洲學生遠程會議”課程為例」、『中文教學現代化學報』、4/2、70-79
- [5] 杉江聡子、三ツ木真美、(2015)、「遠隔交流が創出する学びの経験とその価値—中国語学習における異文化体験の質的分析—」、『e-Learning 教育研究』、10、1-13
- [6] 杉江聡子、(2017)、「日本と中国の遠隔交流が創出する質的価値の探究」、『中国語教育』、15、105-123

謝辞

今回の授業実践は、授業設計、授業担当教師の募集と採用、コーディネート業務など多岐にわたり、台湾の清華大学大学間国際学位プログラム中国語教育専攻（跨院國際學位學程華語教學組）の信世昌教授の多大なる協力を得て実現することができたものである。ここに感謝の意を表したい。